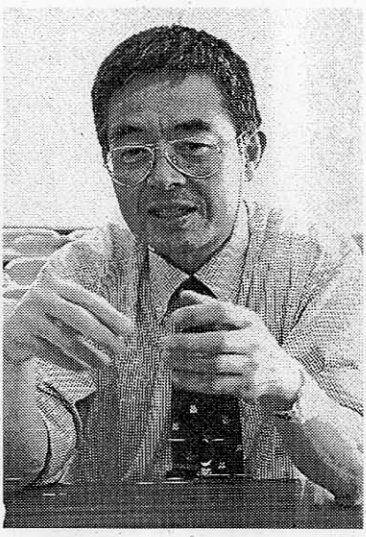


びわこの 考湖学

琵琶湖が日本の歴史に果たした役割を探ろうと、昨年1月から連載している「びわこの考湖学」は前回の第65回で第1部を終え、21日から「信仰」をテーマにした第2部が始まります。過去の人たちがどのような思いで琵琶湖に接し、その思いはどのような形で、現代の私たちに受け継がれているのでしょうか。県文化財保護協会の執筆陣を代表し、同協会の大沼芳幸調査普及課長に上下2回のインタビューで、第1部を振り返りながら、第2部の連載開始に向けた構想を語ってもらいました。



大沼芳幸調査普及課長

第1部の連載、全65回はいかがでしたか
第1部では、湖上交通を軸に、琵琶湖の政治経済史上の価値を中心に紹介しました。古代では日本の6分の1もの物資が琵琶湖を使って大津に、そしてここから、都に運ばれました。中世に至ってはもっと多くの物資や情報が琵琶湖上を行き交っています。従って、琵琶湖を支配管理することは、強力な力と莫大な富をもたらすことになりました。しかし、江戸時代に河村瑞賢が西回り航路を開き、日本海方面の物資が直接大阪に運ばれるようになるなど、琵琶湖の水運は衰退に向かい、明治時代以降鉄道や道

大沼芳幸・調査普及課長にインタビュー(上)

路網の整備により、琵琶湖水運の経済的な価値はほとんど無くなってしまいました。第1部では、琵琶湖の水運を通して、琵琶湖が日本の政治経済史でいかに重要な役割を果たしてきたかについて紹介しました。

第2部に向けての視点は琵琶湖のほとりに人間が住み始めてから、1万数千年。それ以来現在に至るまで連続と人間が住み続け、現在では、県民140万人、流域人口1400万人もの人たちが、琵琶湖を命水の源としてかかっている。琵琶湖を汚すことが、自分たち、そして私たちの子孫たちの命にかかわる大変な問題であることに気づきます。

琵琶湖に対する見方や接し方を変える必要があるのですね
今の琵琶湖は、第1部で紹介したような流通を通じた政治経済的な価値が薄れ、飲料水や工業用水といった水資源的な価値観でとらえられています。また、琵琶湖はいま、さまざまな問題を抱えています。水質の悪化、外来魚の問題など。このような問題の背景には、琵琶湖のほとりで暮



琵琶湖で行われているセタジミ漁 (県農政水産部提供)

らす私たちが、琵琶湖が本来持っている大切な、そして魅力ある価値を忘れ、例えば「水が汚れても浄化すればよい」といった短絡的な考え方が蔓延してしまっていることがあるのではないのでしょうか。

昭和30年代ぐらいまでの人たちは、琵琶湖を水資源だけではなく、いろいろな価値を琵琶湖に見いだしてきました。そして、一方的に琵琶湖を利用するだけではなく、琵琶湖と共生してきました。例えば、シツミ漁を盛んに行えば、琵琶湖の底がかき混ぜられ、水草もあまり生えなくなると、酸素が湖底に供給され微生物たちも活性化します。そしてそれを餌にするシツミも大きく育ち、それを人間がありがたいたたく。ここには、持続的な共生の輪がくるくと回っていました。しかし今、漁が下火になり、湖底に藻が異常繁殖し、この除去のために多くの時間と経費を費やさなければならぬ現実があります。

第2部では、琵琶湖を未来に継いでゆくために先人が残してくれたヒントを、文化財を通して紹介します。

持続的な共生の輪を再び